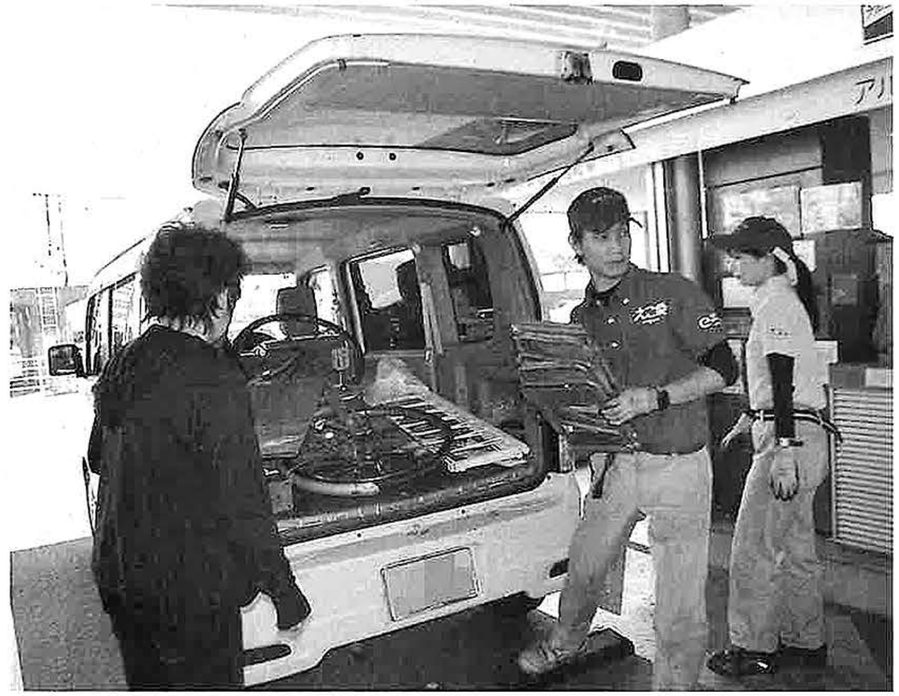
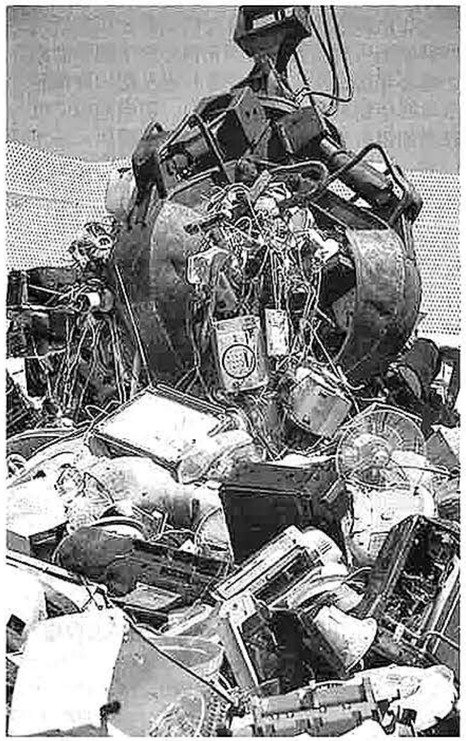
「えこ便」でポイント交換→循環型社会目指す

平林金属（岡山・北区）

小型家電リサイクル法に基づく使用済み小型家電の1人当たりの年間回収量は2020年、岡山県が2・24キロで全国最多だった（全国平均532グラム）。その一翼を担うのが、ヒラキンの愛称で親しまれる総合リサイクル企業「平林金属」（岡山市北区）の「えこ便」。家庭から持ち込まれる不用品をポイントと交換し、高い技術力で再資源化する。今年4月からはおもちゃなどのリユース雑貨や廃てんぷら油にも回収品を拡大。利便性を高め、さらなる資源循環型社会を目指す。【亀田早苗】





「都市鉱山」という言葉がある。廃棄される大量の家電製品に、金・銀・銅など貴重な資源が含まれているからだ。これらを再生、活用するため13年、小型家電リサイクル法ができた。平林金属は同年、国の認定事業者となり、回収から再資源化までを担っている。

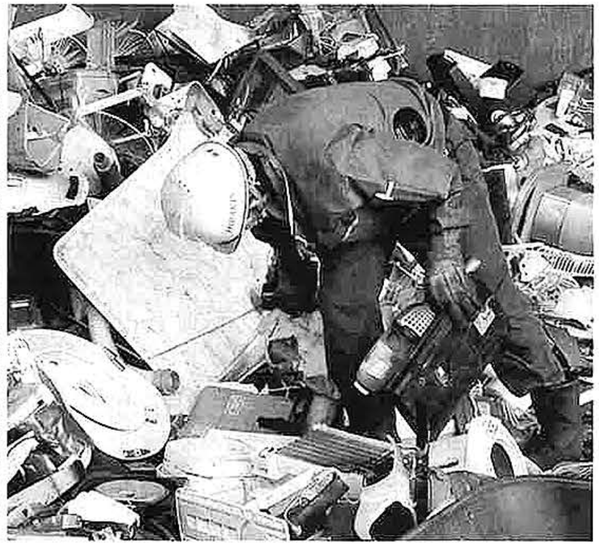
一方で、違法業者が回収し、鉛などの有害物質を適切に処理しなかったり、不正輸出したりして、環境を脅かすケースもある。えこ便は、その状況を変えるため、15年に全国初のスタッフが常駐する拠点型集積システムとしてスタート。役目を終えた小型家電などを消費者から回収し、正しいリサイクルの輪に参加してもらうシステムだ。岡山市内4カ所と鳥取県米子市1カ所に拠点（局）がある。会員制で24年3月までに約14万人が登録した。

回収対象は、家電リサイクル法の対象となる4品目（テレビ、エアコン、冷蔵庫、洗濯機・衣類乾燥機）を除く小型家電、金属類、古紙類など多岐にわたり、10項目に分別される。4月からはリユースショップなどを運営する「ブックオフコーポレーション」（相模原市）と提携し、靴やチャイルドシートなどの雑貨も岡山市内3局と米子市内の局で回収を始めた。また、家庭で使用したり、未使用で賞味期限の切れたりした植物系油も全局で引き取り、提携するバイオディーゼル燃料製造販売（バイオディーゼル岡山）（岡山市南区）が精製して自動車の燃料などにする。

不用品は資源の宝庫

リユース雑貨や廃食油も回収

上えこ便に持ち込まれた家庭の不用品のポストへの投入を手伝うスタッフ下えこ便では、古紙類を段ボール、新聞類、ざつ紙に分けて回収＝いずれも岡山市南区並木町のえこ便並木町局で



上回収されて、再資源化を待つ小型家電など下回収品を事前選別する社員左古紙類は分類、圧縮して、専門業者へ出荷＝いずれも平林金属提供

家庭からの不用品はどのように回収されるのか。並木町局（同区）を訪ねた。一見するとガソリンスタンドのようだ。途切れることなく入ってくる車を川田有希子局長らスタッフが誘導する。利用者は操作パネルの画面に会員証をかざして暗証番号を入力し、持ち込んだ物を分別の項目ごとにポスト（小型のコンテナ）に投入する。重そうな物や分別に迷いそうな物は、スタッフがてきぱきと手を貸している。

各ポストに計量器が設置され、資源の種類と重量に応じて自動的にポイントが算出される。ポイントを確認すれば、操作は終わり。たまったポイントは商品券として使えるカードや、オリジナルグッズ、SDGs（持続可能な開発目標）に貢献できる商品と換えられる。乗ってきた自転車をポストに入れて帰る利用者もいて、実に気軽に使われている。1局平均で平日300組、土日祝日500～600組の持ち込みがあるという。

回収後が同社の本領発揮だ。金属類は「徹底分解、徹底選別」。破砕処理などの後、色や形状のほか、磁石や風力を使うなど、その金属に最適な方法で選別する。リサイクル業界では珍しい「技術開発部」を設け、研究にも余念がない。最後は必ず人の目を通し、純度の高い単一素材に仕上げて各素材メーカーに販売、品質には定評があるという。

県内の小型家電の回収量の多さについて、環境省担当者も「熱心な事業者がいるのも一因」と評価。同社の山本有二広報課長は「えこ便を機にリサイクルを身近に感じてもらい、循環型社会に向けた情報発信をしていきたい」と話す。その言葉には、不用品を資源の宝庫として生まれ変わらせてきた自負が感じられた。

■平林金属　1956年創業。63年に現在の社名に改称し、鉄や非鉄金属、家電なども扱う総合リサイクル企業に発展した。県内外に工場や営業所など計20カ所の拠点がある。グループ全従業員数は518人。ソフトボール部も強豪で知られ、男女とも日本リーグに所属する。えこ便は2016年にグッドデザイン賞、19年には3R（リデュース・リユース・リサイクル）推進全国大会で環境大臣表彰、20年には3R推進功労者等表彰で経済産業大臣賞を受賞した。工場見学や小学生を対象にした講座などを通して、正しいリサイクルの啓発活動にも取り組んでいる。

毎日新聞社提供